

閉 会 の 辞

村 田 治（関西学院大学 学長）

皆様、長時間ありがとうございました。私の閉会の挨拶は、おそらく役割としては、全体を俯瞰してまとめるようにというお話だと思いますので、少し簡単にまとめさせていただければと思っています。

まず初めに、玉上大臣官房審議官におかれましては、お忙しい中本当にありがとうございました。また、会場の設営等々、上智大学様には本当にお世話になりました。心よりお礼を申し上げます。ありがとうございました。

今回の上智大学様と関西学院大学の連携協定の締結を記念したシンポジウムは、「変革する大学」というテーマでした。先ほど、どうして連携協定を結んだのかという質問がありましたが、私から少し答えさせていただきます。おそらく、これからの大学は、個々で競争をし合っていくような時代ではなく、お互いに協力し合っていく、そういった時代になろうかと思っています。言ってみれば、企業で言うプラットフォームをどう形成していくか、日本の場合は残念ながらプラットフォームが現在、形成されていません。それが日本企業の弱いところですが、プラットフォームをどう形成していくかということが大きな課題であろうかと思っています。それぞれの大学が持っている特徴を生かしながら、お互いがそれぞれを補完しながら協力し合っていく、そういった発想です。しかしながら、そこにはお互いの共通点がなければなりません。その共通点の一つとして、上智大学様と関西学院大学はキリスト教に基づく教育を行っている、そういった共通点があることで、今回連携協定を結ばせていただきました。先ほど、曄道学長からもありましたように、本当にどちらから言い出したわけでもなく、私立大学連盟での会議の際に、ふっと話をしたときに、そんな話になったということです。

今日の「変革する大学」というシンポジウムの中身ですが、どういうお話だったかといいますと、教学マネジメントの確立がこれから最も重要であり、その本質の一つが学修成果の可視化である。そして、学修成果の可視化、教学マネジメントを何のためにするのか、それは言うまでもなく、教育の質の保証のためであると先ほど玉上審議官がおっしゃいました。レジュメの15ページのところですが、教育の質の保証と情報公表というところですが。そこには、全学的な教学マネジメントの確立、そして学修成果の可視化と情報公表の促進という項目が並んでいます。まさに学修成果の可視化、これを行っていくためには当然 IR の機能が必要であり、同時にポートフォリオの機能が必要であります。

先ほど、質問の中でポートフォリオと学生カルテの質問が出ました。実は IR というのは、全体のマクロ的なデータ、ビッグデータをどう構築していき、そしてどうそれを読み解き、そしてそれをどう教学マネジメントに役立てるかというものです。本学が今日発表させていただいたポートフォリオは、一人一人の学生が自分の学修の振り返りに使うものです。一方、学生カルテ

は、今日ご報告がありました上智大学様からのIRのデータを、教員、事務局側がそれを使って一人一人の学生の成長をどう見ていくかというマイクロデータ、こういった位置づけができるのかなと思っています。IRを進めていくときには、ビッグデータを扱うことになるわけですから、当然のことながら今日の発表にありましたクラウド化が、おそらく避けて通れないものになっていくと思っています。本学も今、情報戦略本部を立ち上げ、クラウド化をいかに進めていくかということを探しているところでして、今日の上智大学様のお話は非常に参考になると 생각합니다。

さらに幾つかの課題としまして、相生様、豊原先生からIRとセキュリティー等々で、全体最適の問題、これをどうするかという課題が出ていたかと思えます。IRを進めていく上でも全体最適をどうするか、あるいは全体最適をするためにIRのビッグデータが必要となってくる。当然、そこには、ガバナンスの問題が必然的に関わらざるをえない。つまり、教学と経営、両方を合わせた形でのトップの意思決定、全体としてそれをどう組織していくか、または見せていくかというガバナンスの問題が絡まざるをえないのだろうと思っています。また、学修成果の可視化とポートフォリオの関係につきましては、本学では、今、「Kwansei コンピテンシー」というものを定めたところです。先ほど、玉上審議官のお話にありましたように、これから教育の中身が大きく変わってくる。ユニバーサル段階で、知識、技能ではなくて、コンピテンシーレベルの能力がこれから必要となってくる中で、本学としましては、それを「Kwansei コンピテンシー」という形で、10のコンピテンシーに集約しました。このことを今後、学生がポートフォリオを使って、どう身につけていくかということを検証する仕組みに持っていけないといけない。あるいは、この3月に行います卒業時調査からは、「Kwansei コンピテンシー」がどれくらい身についたかという調査も始めようとしています。そういった意味では、さまざまな形で今後、学修成果をどう可視化していくかという大きな課題に対して、上智大学様と関西学院大学が今日試みを皆様にご提示できたのかなと考えています。

今回のシンポジウムが皆様方の大学の教学マネジメント、IR、大学改革にとって有益なものであれば何よりです。

今日は最後までご清聴のほど誠にありがとうございました。心より御礼を申し上げ、私のご挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。